
The another stories —新撰組—

中村 かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The another stories | 新撰組 |

【Nコード】

N4241P

【作者名】

中村 かなた

【あらすじ】

＊暗殺者のセオリー＊

芹沢鴨を暗殺しなければならなかった土方歳三が、その心の内を独白。

＊桜の遺言＊

芹沢鴨ら水戸派が粛清された後も、その生き残りとして新撰組に止まった野口建司。彼の最期と遊女との儚い交わり、そして永倉新八との友情を交えて描いた一編です。

＊総司微熱抄＊

水戸派芹沢鴨の殺害に加わった沖田総司は、それを正義だとは思えずにいた。後悔や焦りに翻弄される総司の姿を描きます。

＊夢の続き＊

池田屋騒動以降、鬱屈する総司は、芹沢鴨の息子に出会う。ふたりの葛藤を綴ります。

芹沢鴨暗殺を軸に土方歳三、沖田総司と殺した側からのエピソードに続き、総司と常親の出会いから、物語は殺された側、残された者のエピソードに踏み込んでいきます。

暗殺者のセオリー（前書き）

暗殺者のセオリ

俺は暗殺者ではない。そう思われてしまうことに、戸惑いを感じずにはいられない。

もし俺が暗殺者として定義付けられるとしたら、あの一件だけの事だと思いたい。

芹沢鴨ら水戸派の粛静。粛静とは、異分子を抹殺する事。たった一晚で、彼らは忽然とこの世から姿を消した。これを暗殺と言わずに、なんと言おう。

文久三年八月十八日、クーデターが起こった。会津と手を組んで、孝明天皇に取り入ったのは、薩摩だった。

長州はしくじった。

この日を境に、長州は朝敵となり、この日を境に、長州と나라の関わりを持ち続けていた芹沢らは、新選組が会津藩の庇護の下にある中、まさしく異分子となってしまったのだ。

尽忠報国という国とはなんだ。国のためとはなんだ。会津も薩摩も、そして長州も。全ては我が藩のため。そうではなかったか。

このクーデターで、実権を掌握したのが、もし長州であったとしても、体制は変わらなかっただろう。

どちらも同じだ。我が藩の利益のため。

それならば、藩という概念に捕らわれず、真っ直ぐに誠忠を唱え、突き進もうとしていた芹沢らの方が、純粹だったのだろうか。

運命は偶然に弄ばれた。長州が都から締め出された後、取り残された芹沢らは、羅針盤を持たない船に乗り彷徨う孤軍となってしまったのだ。

そして俺達は、芹沢が積極的に容認してきた新選組内部の長州色を 払拭しなければならなくなった。

会津藩主松平容保から芹沢鴨捕縛の命令が降ったのは、クーデターから間もなくの事だった。

政変後、俺達にはただちに長州藩残党狩りの任務が与えられた。が、芹沢は長州藩残党をことごとく見逃した。それがつぶさに京都守護職である容保の耳へと届いた。芹沢の背後に潜む水戸藩過激派本国寺党は、身動きが取れないでいる。もう何処へも遠慮は要らなくなった。

俺は容保のやつれた顔に向け、言い放った。

「捕縛などとは、いささか手緩いのでは。」

「ならば、なんとする。」

容保の左頬の皮膚が、神経の疲労のせいで、小刻みに震えている。

「一網打尽。殺るしかないでしょう。」

そう言って、俺は冷たいものが背筋を逆さになぞってゆくを感じ、

身震いした。

「ほんとうに、それでいいのか…。」

生臭い息が耳元に降り懸かる。驚いて振り向いたが、誰もいない。

容保の前で面目を失った近藤が顔を赤くして口ごもった。煮え切らない奴には黙っておいてもらおう。イニシアチブは俺がとる。

「期待してよいのだな。」

容保が念を押した。彼にとって俺達はまだ得体の知れない雑魚にか過ぎない。

「まあ、内部のことはお前達の判断に任せよう。好きにすればよい。」

容保は逃げた。内々で始末せよ。そういうことだ。俺にはその方が都合がいい。

屯所への道すがら、近藤がぼつりと呟いた。

「歳。ほんとうに殺るのか。」

殺るのかではなく、殺れるのか。近藤はそう問い質したいはずだ。俺の剣術の腕を見越せる彼にとって、当然の疑問符だ。

対等に立ち向かえば、敵う相手ではない。内密に罠を仕掛ける。じわりと包囲し、油断させておいて、一気に殺る。

使うのは腕ではない頭だ。

暗殺に失敗は許されない。刃を降るうのは沖田総司、原田佐之助そして俺。あとひとり。山南敬介、あんただ。

山南は、一言も発せられずにいた。この男は賢い。なぜ芹沢らが暗殺されなければならないか、理屈は解っている。

もしこのまま芹沢派に固執するなら、どういう立場に立つことになるかも解らない男ではない。

もう少し狡猾になれ。芹沢のために命は捨てられないだろう。そこまで傾倒はしていないのが正直なところではないか。

山南は保身に入る。俺はそう見た。

「何故、俺なんだ。」

永倉新八だっているじゃないか。

山南は言った。

「あんたじゃなきゃならんのだよ。」

何故か解るか。それはあんたの弱い心根が、その奥底で一番知っていることだ。

永倉は、いけない。この計画を微塵も知られてはならない。

彼は律義で邪心のない男だ。命を賭けてでも、芹沢に注進するだろ

う。剣術の同門であるというよしみだけではない。思想など超えたところで、二人は互いを認め合っている。

芹沢は気性は荒いが、嘘のない男だ。平隊士達にも彼を慕う者は多い。どこか破綻したものを心に抱えている人間。それが凡人にはひどく魅力的に映る。芹沢のそれは、天性のものようだ。

やり方はともかく、カリスマ性がある。

クーデターのおりの出勤。芹沢の何をも恐れぬ雄姿を見たか。今だに語り草になっている。

初めての正式な出勤命令におじけづいている隊士達の精神を鼓舞する方法をこの男は一番良く知っていた。

「さすがは、芹沢先生。」

そんな声が、あちこちから揚がった。

先頭に立つ者が怯んではならない。あれが本来大将たる姿。近藤勇何処へやらだ。

この時だ。俺が危機感を抱いたのは。このままでは、奴等に呑み込まれてしまう。

解っただろう、山南。容保の命令云々ではない。これは、俺の意志だ。

山南は押し黙ったまま身じろぎもしない。頭の中で、暗殺者となるための正当な理由を模索しているようだ。

だがな山南。俺達は、抹殺される者への純粋な言い訳など、これっぽっちも持ち合わせてはいないんだ。

あんたの信念が、芹沢の信念に比べてどれほど清廉潔白でないのと同じように。

そんなものは、俺が鼻息で吹き飛ばしてやろう。

「山南さんよ。近藤さんへの義を取れ。」

試衛館でさんざん近藤に取り入ってきたんだ。近藤への義を取らないでどうする。

俺は、腕組みをしたまま目を閉じた。座敷の空気が澱んだまま、それよりも動かない。

「じれったいなあ。どう足掻いたって逃れられやしないんだよ。」

総司が苛つきながら、返答を促した。

「京へ来てからずっと、俺達にまわりついて離れない運命なんだ。」

運命か。総司はうまいことを言う。殺るか殺られるか、ふたつにひとつ。二分の一の運命だ。

思想も信念も、理想や希望も、俺にはすべて色褪せて見えた。

倒幕も左幕も、尊皇攘夷もすべて右へ習えだ。誰もが口を開けば、

同じことを言う。

あんたも同じ穴のムジナだ。山南、自分の言葉で喋ってみろ。それなら俺も、あんたの言葉に耳を傾けてやろう。

山南が俺を見据えている。恨むなら己の節操の無さを恨め。

さあ、どうする。山南。嫌なら今その左手にある差料を掴み、俺の額を割ろうというだけの気概はないのか。あんたの方が腕があるんだ。その気があればできるはずだ。

沈黙は何の結論も導かない。時間だけがむやみに重く、肩にのしかかってくる。

「よし、決まった。」

安心しろ。答えは俺が出してやる。後の事はあんたの責任ではない。あんたは思う存分その腕を振るい、暗殺者としての責務を全うしてくれればそれでいい。

山南の背中から、力が四方へ拡散してゆく。

「総司はそれでいいな。」

迷いがないのはお前だけか。清々しい顔をしている。

「山南さん。殺ってしまえば良かったのに。」

「誰を。」

「土方さんを。できなくはなかった。あんたは優しすぎる。だから足許を掬われるんだ。」

高瀬川沿いに植わった柳が、川風になびく。風が思ったより冷たい。

「俺なら殺ったね。そして芹沢先生といっしょに組を牛耳って、尊皇攘夷とやらにこの身を捧げるんだ。俺ならそうする。」

「じゃあ、お前がそれをやればいい。なぜそうしない。」

「あんたがしないのと同じだよ。」

総司が柳の葉先を指先で引きちぎった。

罌は仕掛けた。芹沢の片腕である新見錦を追い込む。この男が、長州と通じているのは、明白な事実だ。

長州と芹沢への忠義を貫いた新見は、あっさりと自ら果ててくれた。

山南よ。これが士道だ。なんと高潔な行為だ。くだらない。

俺は、しどろもどろしているあんたの心根の方が好きだ。それがほんとうの人間臭さというものだろう。

島原。角屋。華やかな宴が始まる。

芹沢が酒を飲み干し、愉快そうに笑っている。そうだ、人生の全てをひと時の間に飲み干してしまえ。

俺は満面の笑みを湛え、その杯に酒を注ごう。美味し酒よ腑に沁み込むがいい。そしてしたたかに酔え。

芹沢はその淡い色の瞳で、俺の心の臓のあたりを見つめている。

―俺が、知らんと思うか。

―いや、あんたに分かる訳がないんだ。俺のことなど。

見透かされまいと、俺は眼を逸らす。でないとその瞳に吸い寄せられ、全てを洗い晒しにしてしまいかねない。危ういところだ。この期に及んで、俺がぐらついている。

天空に月が白く輝く。紛れる闇はよりいっそう濃い影を造る。

芹沢の二の腕のたるみに、女の吐息がこぼれ、生きとし生けるものの気配は、深いまどろみの中に封じ込められている。

草鞋の紐をきつく絞めろ。

息を凝らして刀を抜け。

俺達は互いの呼吸を数え、眼差しで合図する。

怯むな！

踏み込めっ！

修羅となれ…！

俺が、暗殺者と呼ばれるなら、この一件の事に限るだろう。

良かったのか、悪かったのか。誰にも解らない。ただひとつ言えること。

俺はこうして、俺達の確固たる居場所を掴んだ。

桜の遺言

どうして……

あの夜、俺も一緒に殺されてしまわなかったのだろう。

建司はため息をついた。

往来に面した窓の障子をそっと開けると、格子の向こうには、いつもと変わらない風景が広がっている。

新年を迎える支度に忙しい人々の声が、路地の隙間から小さく聞こえ、清々しく光る屋根瓦の上には、青空がどこまでも続いていた。

建司に残された僅かな時間が、やがて費えた後も、きっと空は青いままであり続けるのだろう。

「会いに行けなくなるな」

建司はつぶやいた。

先の非番の日に、ふらりと北野の遊里まで足を延ばした。そこで建司は、雪乃という名の遊女と出会った。

月夜に浮かぶ桜の淡い花色を思わせる女だった。

女と情を交えることに、あまり執着しない質だった。けれどこの日、建司は雪乃の体から立ち上る、湿った甘い匂いに胸がざわついた。

無口な女だった。建司も饒舌なほうではなかった。互いにどれほどの言葉も交さなかった。

雪乃が火を付けて寄越した煙草を、建司がひと口吸う。吐き出された煙が、座敷の空気の流れにそって、やんわりと広がる。煙管を返すと、雪乃はそれを煙草盆に向けてぽんと叩く。丸い灰が灰吹きに転がり落ちた。

雪乃が建司の肩にしなだれかかる。言葉はなくても、仕草で喋る。

雪乃の衿の弛い打ち合わせから、建司はその手を忍ばせた。暖かい乳房が手のひらに触れた。

割床の衝立のあちら側で、別の遊女と客の交わりが始まっている。微かな衣ずれの音に、女のあえかな吐息が重なって聞こえてくる。

「冷とおす」

ふふっと笑った雪乃の細い腰を引き寄せ、そのまま情交する。

雪乃を抱きながら、建司は姉の事を思い出していた。

桜の散る頃になると、姉はその花びらの美しいところを丹念に針で掬い、首飾りにしつらえた。

「ほら建司、いい匂い」

「やめなよ、姉さん。もうそんなことして遊ばないって決めたんだ」

口を尖らせ嫌がる建司の首に、むりやり花の輪をかけると「なんだ、つまらない」と、姉はいたずらっぽく笑って逃げて行った。建司の鼻先を ふわりと桜の花の香りがよぎる。

ああ、この匂いだ。雪乃さんは、桜の花びらの匂いがする。

姉は祝言の日取りが決まったというのに麻疹に罹り、あつという間に逝ってしまった。十七だった。目を閉じた雪乃の顔と姉のそれが重なる。

姉が逝ってひどく哀しかった。それでも飯を食い、友人と笑い合っている自分が、建司には腹立たしかった。

その頃、建司の伯父は、尊穰激派の幹部として名を馳せていた。在郷の有士らと郷校に集結していた伯父を頼り、建司は突き動かされるようにして、家を出た。

元服前の少年を 厳しい時代の渦に巻き込む事は出来ない。諫める伯父を前に建司は激昂した。

「前髪が取れてから、出直して来い」

その時建司は、ひとりの男に怒鳴りつけられた。伯父の心中を察しての事だ。

「家を出て来たからには、俺にも覚悟があります」

「子供じみた、つまらん覚悟などいらんわ。とつとと帰れ」

男が建司の左の衿を力任せに掴んで揺さぶった。引きずり倒されそうになるのを建司は必死で堪えた。

「ならんと言われるなら、前髪など今直ぐにここで落とします」

建司は男を睨み付け、そう言った。

「学問も剣術もまだ中途ではないか」

伯父が困った顔で建司を諭す。

「なんと言われましようとも、ここを動きません」

堅くなな建司の態度に男の手元が弛んだ。

「このまま返したら、どこぞで自刀しかねませんよ、野口さん。しかたない。俺が面倒を見ましょう」

「そうしてくれると、ありがたい」

「これでお前も同志だ。誠忠を尽くせよ」

そう言って男は頬を崩した。まだ入牢前の芹沢鴨の精悍な姿だった。

だが、その芹沢も既にこの世にはいない。

雪乃から体を離れた建司は、仰向いたまま天井の木目の節を数えた。

大切な人は皆、俺の腕の中をすり抜け、遠くへ逝ってしまった。

いつの間にか涙が頬を伝い、こぼれ落ちた。

「いや、泣いたはるわ」

白粉を塗った頬をすりよせ、雪乃はその涙を舌でなぞった。その唇が自然に建司の唇と重なりあう。

こういう生業の女は、客に体を開いても唇は許さないものだと言っている。

「ぬしさんですけど」

雪乃は柔らかい体を建司の上から重ね合わせた。弛い曲線を描いて結び上げられた鬢が、ほつれるのもいとわなかった。

あの日の前髪の少年は全てを無くし、その魂は京の坊條を彷徨っている。そして心優しい遊女が、その魂を偶然指先でとらえたのだ。

約束はしなかった。ただ、別れ際に指を絡ませ、儂い時間を愛しんだ。

そして建司は、屯所の一室に幽閉されているのだった。

今朝方の事だ。局長に呼び出され、数名の平隊士に周囲を取り囲

まれた。土方の目配せで、やにわに羽交い締めになれ、鼻面が畳に擦れんばかりに、首の根元を押さえつけられた。土方が甲高い声で建司を詰問する。

先の非番の日、水戸浪士の名を騙り乱暴狼藉を働いたという者が二名、新撰組隊士の手で捕縛され、所司代に引き渡されたという。

「それと、俺にどういう関係があるというんです」

「それがな、野口。奴らの口から、おめえの名前が上がったんだよ」

「そんなはずはありません。そいつらの名を教えて下さい。申し開きはどのようにでも」

「残念だが、申し開きには及ばんねえよ。おめえが本国寺に出入りしているのは、とうに調べがついてらあ」

土方が声を荒げた。近藤は建司の顔を見ようもしない。

あ……。

なにもかも濡衣だ。建司は言葉をつまらせた。そして静かに諦めた。これが建司に用意されていた結末だった。

「副長に知れたらまずいです」

「構わん、会わせろ」

見張りの隊士と押し問答の末、座敷に入って来たのは永倉新八だった。

「すまん。庇ってやれなかった」

永倉が畳に額をすりつけた。芹沢らが殺され、独り残った建司を永倉が影で支えていた。死に急ぐなど。

「頭を上げて下さい、永倉さん。いいんです。このままでは済まないと思っていましたから」

「しかし、あまりにも卑劣な」やり方ではないかと、永倉は拳を震わせた。

「どうにかして逃してやりたい」

「止めて下さい。そんなことをしてもすぐに捕らえられます。永倉さんだって、ただでは済まない。それより永倉さんは生き延びて、俺達の信じた事が間違っていないなかったかどうか見届けて下さい。約束ですよ」

「建司……」

永倉は建司の覚悟に絶句した。

「それより永倉さん。頼まれてくれないかなあ」

建司の声が急に和らいだ。

建司の身の回りのものを収めた行李の中に、小さな箱包みが入っている。それを北野上七軒にある妓楼松葉屋に抱えられている、雪乃という名の遊女のもとへ届けて欲しいと言うのだ。

「約束でも交しているのか」

「そんなんじゃない、ありません。ただの心尽くしです」

建司が最期に託したのは、遊女へ贈る小さな箱包みひとつの想いだった。

「野口建司。本日ここに切腹申し付ける」

切腹は作法に則り行われた。刃を握り、仰向けに倒れないよう三宝を尻に敷く。刃で十字に腹を引き裂く。

声を洩らさぬよう、建司は痛みを忍従する。そしてゆっくり首を差し出した。

介錯人は安藤早太郎。安藤は刀を振り上げたまま、これが武士というものの最期かと、建司の澱みない所作に見入ってしまった。このままでは、痛みに気を失ってしまう。前につつ伏してしまったら、まともな介錯は得られない。我が意に反して、体は苦痛にのたうち回るだろう。せめて最期は気高く逝きたい。

「早くっ」

建司は絞り出すように叫んだ。その刹那の声に、安藤ははっと気を取り戻した。振り上げた刀を建司の首筋めがけ、振り下ろす。白

く光る刃が、建司の項に吸い込まれ、頸堆を断ち切る音がパンと鳴った。

見事な介錯だった。地面に転がった建司の首が、ゆっくり微笑んだ。

師走。二十七日。野口建司逝く。享年二十歳。遺体は光縁寺に埋葬された。文久三年は、こうして暮れていった。

志高くして三条大橋を渡った早春。あれは幻であつたかのように、月日はかくもむごたらしく流れていくものだ。

そんな思いに苛まれながら、永倉新八が上七軒の松葉屋に雪乃を訪ねたのは、年が明けてしばらくしてからのことだった。

箱包みの中には、鼈甲細工の櫛が入っていた。

死んだなんて言っちゃ嫌ですよ。そうだ、急ぎ国許へ帰ったと伝えて下さい。

永倉はそれをやつとの思いで雪乃に伝えた。雪乃はしばらく永倉をみつめていたが、櫛をすげ替えると「そうどすか」と、はんなり微笑んだ。

雪乃の後ろで、建司が満足そうに笑って立っているようで、永倉は泣きそうになった。

帰り際、雪乃が永倉の手に握らせた匂い袋は、仄かに桜の花の香りがした。

「御守りどす。死なへんようにて」

雪乃はきつとこれを建司に持たせたかったはず。

建司よ、これは俺が貰っておこう。俺は死なない。

永倉はそれを大切に懐にしまった。

桜がほころび、花びらが風に舞い散る。

妓楼の張り見世で、雪乃は煙管をくわえ客待ちをしていた。

格子の隙間から舞い込んできた桜の花びらが、着物の裾の紅い蹴出しにとまった。誰かが、それを指先でつまもうと手を伸ばす。

「そのままにしときよし」

雪乃はうつとり目を閉じ、初めて唇を重ねた男の、遠い囁きに耳を澄ませた。

雪乃さんは、桜の花びらの匂いがする。

総司―微熱抄―

微熱にまどろんで口走る、戯言と思って聞いてほしい。逃れられない運命というものは、やはりあるのだと思う。

江戸を離れ上洛すれば吹く風の方角も変わる。風は心の片隅に積もる埃をきれいに運び去ってくれる。俺の心はそんな期待にあふれていた。

しかし、身の置き所を変えろということとは、江戸を離れるという物理的な事象だけでは、どうしようもないのだと気付くのに、たいして時間はかからなかった。

かえって辛くなった。

誰かのせいにしてはならない。選択を間違えたのは俺だ。脳裏に浮ぶ怨み言を何度も打ち消し、俺はいつも笑っていた。

強張った笑みは、面のように俺の顔に貼り付き、取れなくなった。

幼い頃から思っていた。俺は長い夢を見ているのだと。ここにある醜悪な現実とは幻で、本当の姿は別の次元に息づいている。そして、慈しみに満ちた時を育んでいるのだと。

やがて朝がくれば目覚める。この現実とうたかたで、目が覚めてしまえば跡形もない。もうひとつの現実が俺にはあるのだ。そうやって自分を騙しながら暮らしてきた。

俺の心の内にひそむ、いびつな願望は、時に激しいうねりとなり感

情を突き動かす。

自分の意識とは別の者が心を支配し、俺は周囲の者をどれほど傷付けてきたかわからない。

どうして目覚めない！

俺は声も出さずに嘆く。気づくと、朽ち果ててしまった希望が、荒れ野にさらされ乾いた風に揺らいでいた。

人はみな、あやうい。おぼろげな輪郭しかない物を、瞳の裏に確かな映像として結び、海馬の混沌に刷り込んでゆく。

東の空の山の端の、低く雲たなびくあたり。わずかにそれて白い真昼の月が、くっきり浮かんでいる。それでも背景の空の青が透けて見え、今ここにある確かな自分の存在が、ちっともそうではないのだと、俺を見下ろしている。夜になれば、妖しく輝き、人の営みの律動を陰へと誘おうというのに。

俺はまるで、その白い月の陰りに吸い寄せられる悪鬼のようだ。

三年前に麻疹を患った。それ以来、微熱が続いている。微熱が連れてくるまどろむような心地よさは、現実と幻の境界を曖昧にした。そうやって微熱に惑わされているすきに、邪悪な気配が俺の神経を蝕んでいった。体も心もすでに自分の物ではないようだ。

あの男に初太刀を浴びせたのは俺だった。生暖かい返り血が俺の頬に散る。点は面となり、鮮やかな記憶からあの男の温もりを俺の背中に呼び戻す。

男は俺を背中から抱き締めこう言った。

「お前の欲しいものは、全てわかっている」

「だったらどうして俺にそれをくれない」

「それは自分で手に入れるもんだ」

「じゃあ、どうして俺の背中を抱いてくれるのです」

「俺がしてやれるのは、こんなことぐらいだ。後の事は自分でもぎ取れ」

朝起き拔けに、酒をあおるのが男の常だった。昼を過ぎても酒の匂いが消えない。日々を重ねて、微かに甘い酒の香りが身にまとう太物の染めの匂いや、にじみ出る体液の匂いとあいまって、この男独特の体臭となっていた。

俺はこの匂いに酔っていた。ああ、あるはずのない幼児の記憶が、まるで俺のもののように甦ってくる。

はるか幼い頃に、男が覚えた無条件の愛を、その温もりで俺に伝えてくるのだ。そして男が棄てた息子に与えたかった温もり。

俺はその懐にある体温に溶けてしまいたかった。他には何もいらない。

しかし俺は、その傍らに寄り添うことは出来なかった。あの男の懐をいくらまさぐっても、俺の居場所などはない。

なぜ背中を抱いた。その気紛れに、途方に暮れてしまうじゃないか。

ひとつの影がふたつに別れ、その片方が俺でもう一方が芹沢なのを土方が見咎めた。

「何故あの男なんだ」

土方や近藤でないことを憤る。

あんたには俺が欲しいものがわかるか。自分のことで頭がいっぱいで、考えてみた事もないだろう。

「馬鹿なことを言うな。お前幾つになった。自分の事は自分で始末しろ。甘えるな」

土方が、俺のすぎる眼差しを煩しがる。あいつが必要なのは生身の俺ではなく、この剣術の腕だけだ。

ほんとうの俺は、あんたの見ようとしないうところにいる。あんたに見えているのは、総司という名の幻影だ。

芹沢の刃の切っ先が、俺の鼻の下をかすめた。どうせならこの首筋の頸動脈を掻き斬ってくれば良かった。血に塗れて俺もあんたと一緒に死ねた。

芹沢の体に覆い被さる唐紙の上から、何度も太刀を浴びせ、俺は泣き叫んでいた。

もう生きる道標など見失っていた。

「お前は、何か標を持たなければいけない。そんなことでは、ただの人斬りだ」

「だったら、あんたが標になってくれ。見失わないように行くから」

「お前についてこれるかな。そのためには、しがらみを捨てなければならんよ。出来るか」

芹沢は暗に、近藤や土方との訣別を仄めかした。

俺には出来なかった。その代わり芹沢を殺した。ひとつの生をもぎ取る事で、成就する想いもあるということを芹沢は知らない。

しかし悔るな。あの男の暖かい温もりは、俺の背中から消えようとはしない。

＊

元治元年六月五日。盆地の底を、湿った夏の空気が覆う。じつとりと生暖かい汗が、白い鉢巻の筋金の裏にたまる。

俺は抜き身の刀をぶらさげたまま、戸板に張り付く。替えの草鞋が腰のあたりで所在なげに揺れたた。

風すらおきない河原町三条。東に鴨川のせせらぎが聞こえる。

近藤をはじめとする六人で池田屋を囲む。表に一人、裏手に一人。出口を固める。踏み込むのは四人。

確かな情報は何もなかった。軒を数え、一件づつ風潰しに踏み込んでゆく。

その度に息を凝らす。首筋から肩へ、緊張が走る。抜き身を握る腕の血管が隆起し、毛穴がそばだつ。

数を重ねるうちに、だんだんと息が整わなくなってくる。唇で覚える息の数と、肺まで到達する深い吸気が比例しない。いくら息を吸っても充足感がないのだ。

苦しい……。

思わず着込みの襟元をゆさぶると、湿った空気が胸郭の皮膚を舐めるように入り込み、みぞおちのあたりで溜まる。

「御用改めでござる」

近藤が第一声を放った。池田屋の主は顔色も変えず応対する。

京では商人までもが、国事の方翼を担おうという気骨に満ちていた。

しかし、人の持つ強い思念は思わぬ波長を放つ。たぎるエネルギーが階段を伝い落ち、入口の土間で青い焰となりとぐろをまいているのが、俺には見えた。

ここだ。

俺達は直感する。

おそらく目指す相手は階上で密談の真最中だろう。

「中を改めさせてもらおう」

言うが早く、近藤が台所をすり抜け、狭い廊下を足早にゆく。京の町屋は鰻の寝床だ。間口は狭く、奥行きがある。階下は近藤に任せ、俺は階段を一気に駆け上がった。

階下をおぼろに照らしていた行灯の火が、主の息で吹き消され、階下は漆黒の闇の中に沈んだ。

遅れて来た者があるのかと、何も知らず男が出てきて、暗いなど呟いた。

俺は手にした抜き身を下から斜めに振り上げる。そのまま段を上がりながら男の懷へ潜り込むようにして胴を払った。体を斜めにかわすと、男は刀を抜く間もなく階段を崩れるように落ちていった。

近藤は裏階段から階上へ上がったらしい。

「新選組だっ！」

声が上がる。開け放たれた座敷から廊下へ広がる淡い光がたちまちかき消え、天井低く闇が垂れこめた。

奪われた視界は、容易には戻らない。

眼を凝らすより先に、神経を尖らせろ！同志打ちなど笑い草にもならない。俺は奥歯を噛み締めた。

鼻から吸う息が肺まで届かない。届かないうちに吐き出す。

気配を感じようとするが、耳の奥で響く呼吸の音がそれを邪魔した。

女の悲鳴が短く聞こえた。どこかで聞いた声だ。いきなり俺をデジャヴが襲う。

あの夜と同じだ。

烏の濡れ羽の闇の色。喘ぎともつかぬ女の声。耳の奥を仕配する気管の雑音。

俺が追いかけているのは誰でもない。ただ芹沢の姿だけだ。

切っ先に確かな手応えがあった。それは深く骨を断ち切る感触。パシりと鳴ったのは誰の骨が断たれた音だ？

俺はいつの間にか、裏庭に出ていた。降り注ぐ月の光が、狂おしく俺を陰へと誘う。正眼に構えた男の裸足がじりと動いた。そして笑む。

「俺を切り捨てろ。そして再び恍惚となれ。それよりほかに、お前に残された道があるか」

「いまさら、俺のことは構うなッ！」

「ひとつを手に入れたければ、ひとつを捨てねばならん。お前はそ

の選択を謝った」

「そんなことは、分かっている」

「死ぬまで苛め。己自身を」

芹沢はそう言って消えた。

芹沢めがけて夢中で太刀を振ったのは覚えている。あとは曖昧で、
気付くと俺は路則に横たわっていた。

「沖田が気を取戻したようですよ。大丈夫ですかね」

誰かが憐れむように小声で言った。

芹沢に見えたのは長州の吉田稔麿だった。俺は吉田を討ち果し、
そのまま昏倒したらしい。

「芹沢の亡霊を見た」

心配して覗き込む近藤に、俺は洩らした。

「夢をみたんだよ」

いや、あれは夢ではない。自分自身の体に巣くう、邪のあらわれだ。
俺は知っている。全ては自らの成せる業だと。

仰向けのまま星月夜を見る。恒星が瞬き、光年の彼方から光を投げかけてくる。

ほら、星が降るようだ。

流線を描き、時期はずれに星が流れた。

こうしていると、地上にいる人は、あまねく独りだと痛感する。独りで生まれ独りで死んでゆく。標など持たなくても、たどり着く普遍の終焉だ。

俺はようやく起き上がり、土方を見た。土方の顔は大事を成した後の自信に満ちあふれ、上気していた。

あんたに迷いは無いのか。憂いは無いのか。その築いてきたものは、折り重なる屍体を踏み台にし、夥しく流された真紅の血に塗れているじゃないか。

いつまで続ける？ 終わりはあるのか？

祇園会所から、壬生屯所へ。星屑の降りそそぐ往来の土を踏み締め、蒼褪めた修羅が列を成して歩く。

見ろ！

足元で粉々に砕け散って輝いているのは星屑ではない。俺達の磨り減った魂の破片だ。

無口な隊列は見えない明日へ向かって進む。魂の破片を踏む音が、やがて壬生村に流れる西高瀬川のせせらぎに重なり、朱雀の竹林へ吸い込まれて消えていった。

皆はもう気付いていた。俺達は道に迷ってしまったことを……。

夢の続き―総司と常親―

総司は微熱を抱えたままだった。

池田屋襲撃以降、それとは気づかないわずかな疎外感が、総司を倦ませた。

剣術の稽古にも身が入らず、それでもこなさなければならぬ隊務がわずらわしい。

やがて倦怠感が総司を襲い、外へ出ると冷や汗やめまいに悩まされた。

こんなことではいけないと思うのだが、床を離れられない日が数日続いた。

夜半にひとしきり降った激しい雨が、夏の名残をを引きずる暑気を運び去った。

入れ替わるように、艶やかな初秋の香をたずさえた風が簾の裾を押し、総司の床へ手を伸ばした。

昨夜はよく眠れたようだ。

その激しい雨音は、近く遠く鳴る潮騒のように心地良く、総司の意識を溜まる雨水の深い水底へとを誘った。

風の匂いにふと目覚めた。

季節は知らないうちに移り変わり、体だけがそれを感じて大人びてゆくのだと総司は思う。

心はまだ赤児のようで、あやふやなものに惑わされてばかりだというのに。

「近藤さんは京へ来てから変わったな。あの人がいなくなってからはとくに」

近藤の以前を知る者は口々に言った。

芹沢肅清以後、ひとつの思想を頼りに集結していた隊士達は、方向性が揺らぎ始め、隊士への締め付けだけが厳しくなった隊を次々に脱した。

「ふぬけた奴らだ」

日ごとに増す脱走者を土方が侮蔑した。

自分も不拔けのひとりに数えられるのかどうか、面と向かって土方に聞いてみたいものだと思つた。

「今日は気分が良いのか」

近藤に声を掛けられた。総司は気づかない振りをし、屯所を離れた。池田屋襲撃で名をあげ、懷も潤った隊は、徐々に勢いを盛り返していた。

朝から聞こえるわずかばかりの喧騒が、総司にはわずらわしい。たまらなく独りになりたかった。

浸潤した雨に、往来を形成する土が匂いたつ。

雨の匂いはそれ本来のものではなく、沁みていくものの匂いを際立たせる。

たとえば土埃の、あるいは草いきれの、香しい花芯の、そして若い娘の袂にただよう焚き物の……。

ひとときの間にその匂いは移ろっていくのだ。

八木の家の前を過ぎようとして、総司の足が止まった。

門扉に続く板塀にもたれかかっている若い男と目が合った。

濃い藍に白い蚊紺の木綿の単衣。細い縞の袴を足高にまとい、手甲脚半と旅装束のままだ。

ほんの今し方、三条の橋を渡って来たという風情で、物憂げなのは疲れのせいでもあるかのようだ。

無防備に腕を組んでいた男は、背筋を伸ばし居ずまいをただすと、総司に軽く会釈をした。

入隊でも希望する若者だろうと一瞥し、総司は過ぎようとした。

男は再び塀に寄りかかり、雨に清められた空を仰いだ。

おもむろに爪を噛むそのしぐさを視野の隅にとらえた総司は、はっ
として思わず振り向いた。

総司よりはいくぶん若いのだろう、頬のふくらみに幼さが見える。

透けるように白い肌に淡い鳶色の瞳。高い上背を持て余すようにし
なう体。

そして、爪を噛む子供のように無心な仕草が、あの男に似ている。

若い男が携えている腰の物に、総司は見覚えがあった。

柄袋の中は紫紺の紐を長巻きにした柄が収まっているはずだ。二尺
七寸の長刀。まさしく芹沢鴨の遺した刀だ。

鴨の長刀は、葬儀に参列した芹沢家の親族が形見にと持ち帰ったは
ずだ。そのあたりの縁者だろうか。総司は確かめずにいられなかつ
た。

「失礼ですが、芹沢先生に御縁のあるお方でしょうか」

男は爪を噛むのを止めると、首をかしげ唇を開いた。

「人に氏素姓を尋ねる時は、まず自ら名乗られるのが筋ではありません
せんか」

丁寧だが、口調が厳しい。男は総司の方へ向き直った。切れ長のす
ずやかな目と華奢な体つき。

よく見ると芹沢とそれほど似ているわけではなかった。

似ていると思ったのは、自分がそれを求めているからではないか。総司は自分自身を疑った。

「これは、申し訳ない。私は白河藩脱藩浪人沖田総司といいます」

芹沢の縁者の前で、彼の殺害に直接手を下した総司は、新選組を名乗ることをはばかった。

やはり後ろめたい。

「私は常陸国松岡領松井村神官、下村常親と申します。芹沢鴨にゆかりある者に相違ありません」

言葉の最後が総司の肺の中の空洞に響き、金属がこすれ合うような音をたてた。

「その刀は……」

音の余韻に声が震えた。

「これは芹沢の本家の伯父が私にと拵え直してくれた物です。私が持っているのがよからうと。二尺七寸もある長刀です。上背がなければ持てません。だからあの人と背丈の似通った私の元へ、自然とまわってきたのでしょうか」

常親と名乗った男は、その左手で袋に収まっている刀の柄をなでた。

常親の指先に、湧き上がるような愛着を総司は感じた。

常親は名乗らない。

芹沢が自分の父である事を……。

芹沢が捨てて来たというひとり息子には、すでにこの世の者ではない父親に真っ直ぐな愛情を注いでいた。

血の繋がりというものはこうも揺るぎないものなのだろうか。

「そうでしたか。ところでいくつになられます」

総司の問いに常親は、そんなことまで訊くのかと怪訝そうな表情をみせた。

「十九になります」

常親は答えた。

総司も芹沢も、お互いが無いものを求めあっていた。それは始めから分かっていたはずだ。

泣くのはみっともない。しかし、こらえようとすればするほど涙があふれ、景色が歪んだ。

そんな総司の様子を見て、常親は戸惑っているようだった。

「あの人のために泣いてくれているわけではないのでしょうか？」

常親の両手が、総司の右手を包み込んだ。こぼれ落ちた総司の涙が、常親の親指ににじんで溶けた。

不覚だった。悔しくて切なくてこぼれた涙だった。

芹沢に父親を見ていたなど、認めたくなかった。そして自分が常親の変わりにはなれなかったと……。

そんなことは、とても言えない。

「どうか泣かないください。あの人はようやく私の元へ戻って来てました。きっと安らかなはずです。あの人を苛むものは、もう何もないのですから」

そして刀を見つめたまま、十七年待ちましたと常親はつぶやいた。

父が暗殺されたと聞いても、常親は驚かなかった。いつかそんな日が来るのだと、父が下村の家を出た時から幼心におぼろげにわかっていた。

上洛すると決まったあと、父は別れを告げようとしたのか、それとなく常親の元を訪れた。

ありきたりの会話を交わし、酒杯でささやかな宴をひらいた。

その夜は同じ座敷に床をとった。夜着に包まれ、父の寝息を確かめ

る。常親は眠れない。ひとつでも余分に父の寝息を感じていたい。

「父上、覚えていますか。あなたが下村の家を出る時、私をその腕に抱き締め、頬擦りしたのを……。その感触はまだ私の頬に残っています。私はたったの二歳でした」

父の寝息に、常親はつい恨み言をつぶやいてしまった。

「ん」

夜着の中から声が聞こえた。常親には「すまん」と聞こえた。

夜が明け、ほかに気のきいた言葉を交わすこともなく、常親は父の大きな背中を見送った。

その向こうに、ふいに見覚えのない景色が透けて見えた。気のせいかと何度か瞬いた。

そして常親は確信した。父と会うことは、もう二度とあるまいと。

そして父の背に映ったあの景色は、まさしくこの京の町並みだった。

年号が元治に変わり、水戸藩政は迷走を始めた。

三月には藤田小四郎が筑波山に挙兵。八月には反勢力が水戸城を占拠。

くすぶっていた内紛の火種が、一気に燃え上がった。

常親は浮き足立った。

父のやろうとしていたことを今確かめておかなければ、それはあつというまに土くれとなり砂となる。砂は風に運ばれ舞い上がり、絹雲が描く軌跡の向こうへ逝ってしまう。

仕方ないものと無理に納得させ、押し込めていた感情が、勢いよく溢れてきた。これをどうにかしなければ、いっぽも先へは進めない。

伯父の成幹にその思いを伝えた。

鴨の年老いた父親は、可愛がっていた末子の死を受け入れる事が出来ず、心労で寝込んだまま、息を引き取った。

変わろうとする時代に犠牲は必要なのだと思う。しかし、殺されなければならなかった者の思いを知らなければ、残された者は生ける屍だ。

間違っているだろうか。そこから始まる何かがあるはずだ。

そう心に決め、伯父の成幹と中山道を歩いて来た。

しかし、三条の橋の袂で足が止まった。

「こんなことをして何になるのでしょうか」

唇が微かに震えた。

父のやろうとしていたことの痕跡など、何も見つからないかもしれない。

父が京の町の土を踏み締め実現しようとした希望。

それをやみくもに知ろうなんて事が、思い上がりなのだ。常親は愕然としていた。

耳を澄ませ。俺の残した息づかいが、お前には聞こえるはずだ。

父の声が風の中から聞こえてきたようなきがした。

意味など求めてはいけないうちのかもしれない。結果を恐れてもいけない。

「常親、お前の父は怯まなかった。お前に同じになれとは言わない。しかし、その死は乗り越えていかなばならない。だから京まで来た。そうではないか」

伯父の問いかけに常親は答えられない。その代わり、涙がこぼれた。ものの心つかないうちに母に死なれ、父とも別れて暮らすようになった。

以来、心の底にずっと寂しさを隠して生きてきた。

泣けば周りの者が不憫がる。気をつかわせてはいけない。だから泣かずに来た。

父の死とも折り合いを付けなければと、訃報を聞いても涙ひとつこぼさなかった。

「伯父貴、泣いてはいけませんか」

成幹は何も言わない。常親の涙が涸れるのを待っていていた。

そのまま通りを泣きながら歩いて来た。

そして沖田という青年に出会った。

父に刃を振るった青年を目の当たりにし、彼を憤れない自分がいた。

「沖田殿、会えて良かった。あの人は確かにここにいたのですね」

総司は顔をあげ、わが目を疑った。常親の後ろで芹沢が頬笑んでいるのだ。

唇を噛んでうつむくな。泣き顔を上げて前を見ろ。お前には何がで
きる。失った標をとりもどせ。

芹沢に生き写しの成幹の姿をみながら、総司は芹沢の幻を見ていた。

「伯父上が父上にあまりに似てるので、驚いておいですよ」

「そうだな。八木家のご新造にも、驚かれてしまったよ」

成幹が苦笑した。

「墓に手を合わせてこよう」

ふたりは壬生寺へと消えて行った。

芹沢が意図ある残映を総司に見せているかのようだ。

はたして残映なのか。微熱が見せる夢ではないのだろうか。夢ならばもう少し続きを見ていたいと総司は思う。

総司はふたりを追いかけて、壬生寺へと向かった。そして柔らかな夢の中へと踏み込んで行った。

芹沢の傍らで見たかった、夢の続きを見ていよう。

翌日、八月十五日。蛤御門の変勃発。

京の町並みは火に吞まれた。

総司の夢はそこで途絶えた。

やがて総司は病を患い、早い死を迎えた。

常親は神官として、医者として働き、下村の家を守った。

維新を迎えはしたが三十八歳で早折する。常親には子が無く、芹沢鴨の血はここで絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4241p/>

The another stories 一新撰組一

2011年11月15日14時33分発行